

はじめに

『ことばの関係式化を進める』この表現を、今回のキーフレーズとして話しを進めたい。「関係式化を進める」とは、ひとつのことばを、単独のものとしてではなく、他のことばとの関係性の中で規定して行く、という意味である。もし心の中に、ことばの掲示板のようなものがあるとして、そこに、まるで絵のように、ひとつひとつのことばを貼って行けば、掲示板はあつと言う間にいっぱいになって、古いことばを外しでもしないかぎり、新しく出会うことばを飾るスペースはない。けれど、もし、ことばが、1枚の絵から、 $X+a$ のような関係式に置き換わったら、絵のときよりもはるかに多くのことばを掲示することができる。そうしてそれだけではなく、絵のときには隙間があいてバラバラだった、ことばとことばが、それぞれに $+$ や $-$ や $=$ や $>$ で結ばれて、次第に密となり、網の目となる。それこそが、ことばのネットワークであり、私たちは、そのネット(網)のおかげで、投げかけられたコミュニケーションのボールを後ろに逸らさず受け止め、また、その弾力により、投げ返すことができる。ことばの発達とは、ことばの関係式化の進展に他ならず、発達障害の子どもの多くは、さまざまなレベルや、領域で、この関係式化に支障を来たしている、と考えることができる。◆言語習得のプロセスを振り返ると、生後1才前後で、初めての意味のある言葉を発し、それから半年のほどの間は、初期50語期と通称される。この時期の特徴は、ことばの獲得の速度がゆるやかで、また定着度が低いとされている。つまり、ことばを話し出してはいるけれども、まだ本当に身についたものにはなっていない。今回の「ことばの関係式化」というテーマに対応させて考えると、初期50語のことばは、関係式の構成要素となるための記号に、まだいたっておらず(半記号的)、それゆえに、その先の関係式化も進んでいない段階と考えられる。そうして、1才半を迎えると、ことばは急速に増え始める。「語彙の爆発的増加」と通称されるその状況は、まさしく、ことばの関係式化の進展を背景としたものだろう。こどもは、生来の形質として持ち合わせている、“関係性への希求”を、ことばという記号世界の中に取り込んで、日に日に、より正しく、広く、深いことばを築いて行く。◆発達に未熟さが強い子どもは、「初期50語」の段階にとどまっていると考えられる場合が多い。また、それ以上の発達を遂げている子どもの多くも、ことばのネットワーク化(関係式化)が進んでおらず、そのことがコミュニケーション障害の要因になっている。言語習得研究のこれまでの知見を踏まえながら、ことばとことばを繋ぎ合わせるための学習の工夫を考えて行きたいと思っている。

はじめに(2011年2月セミナー)

赤いボールを空中に放る。手元に戻ってくると青いボールになっている。もう一度放り上げると、また赤いボールに戻っている。ボバーマンという人が作った多面体の玩具だ。また、小さかったリングが、ほんの少し力を加えるだけで、その何倍もの大きさに広がり、また力を加えると、あっという間に元の小さなリングに戻る。それらの玩具は、人間の言葉をよく比喻しているように思われる。ひとつの言葉には実に多くの側面がある。まるでウニのように四方八方に手をのばして、ほかのことばを結びつき、濃密なネットをつくっている。その一方で、すべての人が「りんご」ということばを聞けば、ひとつのある統一されたイメージを思い浮かべる。人間はことばを拡大したり、凝縮したりを、自由自在に繰り返しながら、毎日のコミュニケーションを行っている。◆発達障害の子どものことばの多くは、この多面性と凝集性に欠けている。まったく的外れというわけではないが、適切とは言えないことばを用いることが多い。たとえば、回転している風車を見て、それを「巻く」と表現する。また、両方から引っ張られて破れた新聞を「壊れた」と表現する。語彙が乏しい子どもに見られる、このような誤用は、どのようにして生じているのだろうか？ 語の意味するところを広く取りすぎている、他の語と意味を取り違えている、適切な表現が浮かばないため、取りあえず近傍の語を用いている…etc 自分の言語活動に対する洞察がまだ難しい子どもに、その誤りの機序を語らせるのは難しい。◆これらのことばを、ひとつずつ学習することは可能だが、それをもし、量として捉えるのであれば、浜辺に落ちている貝殻を拾って歩くようなものだ。言語習得の本質が、ことばとことばの関係を推し量り、ひとつひとつのことばを、より深く、正しく知り、そのことにより、ことばのネットワークを築いて行くことだとすれば、ことばの学習の主眼も、日常生活の中での自然習得に置かれるべきだろう。自らことばを切り拓いて行くための仕組みを、どのように後押しして、育てて行けばよいのか。その難問への明確な解答は、まだだれも見つけていない。言語発達に関するこれまでの知見を手掛かりに、少しでも有意義な教材や課題を工夫して行けたらと考えている。

はじめに(2010年7月セミナー)

「コップ」とは何だろうか？ 液体を入れる容器ということであれば、ほかにも鍋・バケツ・ビーカー・柄杓…いろいろある。飲料の液体に限定しても、グラス・カップ・ジョッキなどのことばがある。わたしたちは、日常、何をコップと見なし、何をコップとは見なさないのだろうか。コップの定義を辞書で調べると、その内容はまちまちである。ある辞書は、「水・ジュースなどを飲むのに用いる円筒形のガラスの容器」とあるし、ある辞書には「紙・プラスチック・ガラスなどでできた、主に飲料に用いる取っ手のない容器」となっている。しかし、ステンレス製の取っ手のある容器を持っているが自分はそれを「コップ」と呼んでいる。◆描かれた絵を見て、10人中ほぼ10人が、それを「コップ」と命名するようであれば、その絵はコップの特徴をよく表現していると言うことができる。けれど、その特徴を、ことばで説明することは、なかなか難しい。その難しさは、発達障害のある子どもに対する語彙学習の困難さとよく似ている。わたしたちは、日常生活の中で、ごく自然に、いつのまにか、日本語における「コップ」とは何かを洞察して行く。年齢を重ねるごとに、「コップ」というひとつのことばは、正確化し、精密化するが、その過程は、人為的な教育プログラムによるものではない。コップを正しく理解させるためには、その自然習得過程を、どこまで人工学習に取り込めるかに懸っている。◆もし、あいまいだったコップの地図を正確に描くことができれば、結果的に、コップ周辺のことばの国の地図が浮かび上がって来る。コップの隣には、国境線のあいまいな「カップ」があり、コップの国内には、「グラス」という小国が発見される。こうして語彙は増えて行く。さらにコップは、「容器」という国の一部であることに気づき、さらにはもっと広大な「道具」や「物体」という国の小さな1要素であることを知る。しかし、より広い国の存在を知るためには、ずいぶん高い地点からことばの地図を見下ろさなければならない。高い地点から見下ろすということは、物事の表面的な特徴の把握から、定義的で概念的な、すなわち、目に見えない「本質」の洞察への移行と重なるものである。◆語彙習得は、足し算ではなく、ことばの地図の上書きに他ならない。あいまいで不定形だった地図が、刻一刻と、新しく正確な地図に更新されて行く。その地図の書き換え作業に、どのようにしたら力を貸せるのかを考えてみたい。